

オーストラリアの慰安婦像はこうして阻止した

母親と子供を守るために

2014年春、シドニー郊外のストラスフィールド市で持ち上がった慰安婦像設置計画。中韓住民らの運動に隠された真意とは

私は韓国人が目を丸くして驚嘆している光景を何度か見たことがある。予想しない事態に遭遇して、心底驚いた、という顔だ。

それは、彼らが日本人に堂々と反論された時だ。

日本人は反論しない、歴史問題で責めれば黙って下を向く——。韓国人や中国人はそう思い込んでいる。

だから日本人が冷静に、論理的に反論してきたら、それは驚天動地の事態なのだ。

そんな体験のうちの一つを、紹介

しよう。

慰安婦像設置阻止へ

日米豪混成チームを結成

アメリカ各地で、韓国系団体などの働きかけにより慰安婦像が建立されているが、その動きがオーストラリアにも飛び火している。

2014年4月1日、シドニー郊外のストラスフィールド市議会において慰安婦像設置に関する公聴会が開催された。私が公聴会開催の動きを知ったのはその前日のことだっ

た。

3月31日。工作中、パソコンに「なでしこアクション」からの拡散メールが届いた。シドニー郊外の町ストラスフィールド市に住む、匿名の日本人女性からのメッセージだった。

「日本人の皆さん、明日の午後6時、市庁舎に集まってください！公聴会が開かれます！」

一瞬、時が止まったように感じられた。「とうとう来たのか」——初めて見る「なでしこアクション」の

ホームページに飛び、メッセージを送った。「この女性に私の電話番号を伝えて、すぐに連絡をくれるようお願いしてください」。「なでしこアクシオン」は、慰安婦問題で日本を貶める勢力と戦う日本の女性たちのグループだった。

公聴会で誰がスピーチするとか？ 準備はできているのか？

しばらくして、メッセージの主な友人というオーストラリア人男性から私の携帯に電話が入った。

私「明日、公聴会でスピーチする必要があるんだって？ 準備は？」

豪「できていない。何か意見はあるかい？」

山岡鉄秀氏

Japan Community Network

代表。シドニー在住豪州ス

トラスファイールド市における中韓反日団体

による慰安婦像設置推進運動に遭遇、地元

の母親を率いてJCNを結成。地域社会融

和の大切さを訴えて市議会に設置可決を見

送らせた。

私は持論を述べた。「相手はいつも通り歴史問題で日本を糾弾してくるだろう。しかし、相手の土俵に乗って反論すべきではない。事実関係

がどうであれ、そんな問題をローカルコミュニティに持ち込んだらダメだという原則論を一貫して主張すべきだ。君のような地元のオーストラリア人が発言してくれたら説得力があるんだが」

豪「同感だ。そういうことを主張するのに最適な友人がいる。アメリカ人だけど、夫婦でチャリティーに熱心なクリスチャンだ」
そこで彼の声が、少し不安気になった。

「でも、公聴会は明日だ。どうしたらいいと思う？」

私はためらわずに言った。

「今夜君の友達をみんな集めてくれ。母親達もみんな、できるだけの人数を」

その夜、見ず知らずの日本人、オ

ーストラリア人、アメリカ人が10人弱集まった。

自己紹介の暇もなかった。数時間でスピーチの準備をしなくてはならないのだ。地元の日本人男性の言葉は衝撃的だった。

「明日出向いても、どうすることもできないんです。なにしろ、この地区に住む日本人は、子供まで含めて70人程度、中韓は合計で1万人以上いるんですから」

70人对1万人の差は確かに大きい。だが私は咄嗟に「マイノリティだから負けるとは限りませんよ。マイノリティにはマイノリティの戦い方があるはずですよ」と自分自身を鼓舞するように答えた。

4対4のスピーチ対決の結果：

兎にも角にもスピーチの順番と構成を着々と進める。先頭打者はオーストラリアで生まれ育った日本人大学生。2番手は私に電話をくれたオ

1 ストラリア人男性、3 番手に慈善活動に熱心なアメリカ人男性、そしてもし、4 枠目があったら、私が自分で立つ。そう決めた。

見ず知らずの人々と作業する。奇妙に充実した数時間が過ぎる。自己紹介する余裕はなかった。

明けて4月1日。私は平静を装っていつも通り仕事をし、定時の午後5時きっかりに会社を出ると車に飛び乗った。

ストラスフィールド。人口4万人弱。うち、中国韓国系住民が約30%を占める。

夕暮れに白壁が浮かび上がる市庁舎。何やら楽しげなお祭り騒ぎの一团がいた。中高年の中国人・韓国人男性の群れだ。すでに戦勝ムードで歓談している。3人のお地藏さんのような銅像の絵を掲げて記念撮影に興じているグループもある。普段は接することのないタイプの人々で、70〜80人はいるようだ。

日本側もメールの拡散が効いたのか、主に女性が30名ほど集まっていた。私

の頭の中は、公聴会が始まる前にいかに素早くメンバーの原稿をチェックするか、で一杯だった。市庁舎の外に立ったまま、中韓団体の喧騒を背に各人の原稿に目を通す。どれも良く書けている。打ち合わせ通りだ。考えてみれば、私以外の3人は西洋社会で教育を受けている。スピーチは得意だろう。英語もネイティブだ。

やがて公会堂の扉が開かれた。聴衆用のパイプ椅子が並び、正面には市長を中心として左右に3人ずつ市議が座り、向かい合う位置には、発言者用のマイクが一本置かれている。日本とは違い、市長は市議の中から互選で選ばれる仕組みで、実は市議でもある。

市の事務方職員がやってきて、発言予定者の名前を書くように言う。

4 枠あるとのこと。それなら最後に、相手の主張を踏まえて、私がまとめの反論をしよう。中韓団体は北米での活動組織と連携しているはずだ。何か変化球を投げってくるに違いない。

スピーチ合戦が始まった。韓国人の中年男性がトップバッター。アクトセントが強すぎて何を言っているのかわからない。とにかく《日本はひどい、安倍は悪い奴だ》とまくしたてているようだ。制限時間のベルが鳴っても、終わる気配がない。市長が手振りで「話をまとめてくれ」と合図する。これは最初から荒れ模様か。

日本側の1番手は大学生。日本という所の芸大生だ。爽やかな青年である。この慰安婦像問題が勃発してから、彼の友人が学校で中韓系の同級生や講師から差別されるようになったという。こんなことでは、大好きな豪州が誇る多文化主義が崩壊し

はありません。これは韓国人、中国人、豪州人の慰安婦三姉妹です。この銅像を駅前建てれば、観光名所となることでしょう」と訴える。お地蔵さんかと思つたら、慰安婦三姉妹だったとは。むりやりオーストラリア人を入れれば反発をかわせると判断したのか。

そして公聴会最後のスピーカー、私の番となった。

相手のスピーチは聞き取れない部分も多かったが、言いたいことはほぼわかった。

私は原稿の代わりに日系無料情報誌を手にした。掲載されている中韓団体の取材記事が、問題の本質を顕かにしている。私は可能な限り穏やかに話し始めた。

「歴史の学び方はいろいろありますが、こんなやり方は感心しません。私たちはいつでも、中韓コミュニティの方々とは歴史について語り合う用

意があります。しかし、慰安婦像を建てる真の目的は何でしょう。この新聞のインタビュー記事にはつきりと書いてあるようです。慰安婦像推進団体の代表の方が、明言していませんね。

慰安婦像を建てる目的は、日本が昔も今もどんなにひどい国か、世間に知らしめるためだと。その目的のために、全豪に10基の慰安婦像を建てるのが目標だと。この内容に間違いがないことを会長さんが承認しているとあります」

「アメリカでは慰安婦像が原因で日系の子供達に対して差別やイジメが発生しているのですが、それについては（日本人特有の嘘だ）と言い切っています。こんなことがまかり通るのなら、私は決して自分の子供をストラスフィールドの学校には行かせないでしょう」

「これは明らかに政治的な反日キャ

ンペーンであり、慰安婦像はその象徴に過ぎないということです。慰安婦三姉妹と言っています。女性の人権をとりあげるならば、他の国の女性も含めなければ差別にあたるのではないのですか？」

「これまでのところ、ストラスフィールドは、多文化主義が最も成功した町です。その評判を維持しなくてはなりません。慰安婦像によつて分断された町として記憶されてはいけません。市議会の皆さんもきつとそう思うのではないでしょうか！」と言った途端、まるで測つたように時間終了のベルが鳴った。これは偶然である。

日本人応援団の拍手を背に一礼して、私は席に戻った。これでスピーチ合戦は終わりだ。市議たちが協議のために別室に移った。

内容はこちらが凌駕していたと確信した。相手をけなしたり、攻撃し

たりするのではなく、淡々と終始一貫、理を説いたのだ。我々は感情に支配されることなく、しかし、情感を持ってコミュニティの融和の大切さを訴え続けた。

ざわめく会場で45分が経過した。

市議たちがやっと戻って来た。市長が静かに話し始めた。「この問題は市で判断できる問題ではないので州や連邦の大臣に意見を求めます」

一瞬意味がわからなかったのですが、近くに座るオーストラリア人に尋ねると、彼は腕を組みながら答えた。

「自分たちで判断せず、州や連邦に投げて、棚上げにするという意味さ」

却下しなかったのはおおいに不満である。しかし、とりあえず強行突破はされずに済んだ。9回裏10対0から同点に追いついたのだ。市議会は明らかに我々のスピーチに軍配を上げたのだと思う。しかし、中韓団体のゴリ押しの政治力を考慮して、

即時却下はできなかったのだろう。

中韓応援団は皆、ボカンとしてやる。やがて事情が呑み込めると、「信じられない」「こいつらは何者だ」という目でこちらを見つめてきた。日本側が毅然とした態度で反論した。そんなことは筋書きにはなかった、と顔に書いてある。

一方、こちらは見知らぬ人々から握手を求められた。親日派韓国人から握手を求められた仲間もいたらしい。

公聴会ではなんとか防戦したが、これからは本格的な戦いになるのは明らかだ。我々は依然としてお互いをよく知らぬまま、健闘を称え合って帰路についた。

今回、像設置に動いた反日団体「日本の戦争犯罪を糾弾する中韓連合」(以下、中韓連合)はあくまでも慰安婦像設置に向けて活動を継続しようとしていることから、我々も

その週末、公聴会参加のメンバーが集合し、既存の日本人会とは別に、慰安婦像阻止活動のためのグループを結成することになった。JCN (Japan Community Network) の誕生だった。

集まったメンバーは、地元の母親たち、スピーチに立ってくれたオーストラリア人、引退した日系企業の元駐在員など、こんなことでもなければ知り合うこともない様々な背景の顔ぶれだ。

国家とローカルコミュニティの「防衛二元論」

日米豪の一夜漬け混成チームで臨んだ公聴会でのスピーチは、切り口は様々ながら、全体を貫く一本の芯があった。嫌韓、嫌中という言葉があるが、我々はそのに雪崩れ込むことはしないよう心掛けた。なぜならば、地元の母親たちは地域に溶け込

んでおり、子供たちは中国人や韓国人の友達とも遊んでいるからだ。

守るべきは、この地域共同体の融和と平和な生活であり、特定の政治的イデオロギーとは一線を画すよう努力した。

日本人の母親たちは、韓国系から攻撃されている被害者の立場なのに、地域社会では波風を立てないように常に気を遣っている。そこまで気を遣う必要はないと思うものの、彼女たちの意向は最大限尊重されるべきだ。彼女たちが勇気を持って立ち上がらなければ、JCNが発足することもなく、慰安婦像設置はあつさり可決されていただろう。

公聴会のスピーチを組み立て、アンカーに立った私が、成り行きでこのJCNの代表となった。最初の作業が「活動理念」を明確にすることだった。というのも、慰安婦像設置に反対する我々の意見に地元の市議

会が賛同してくれるよう、活動のスタイルと理念を明確に定義して言語化し、皆の連帯を維持しなくてはならないからである。

最初に提示した理念は、「非敵対的合理主義」である。

我々は公聴会でも、敵対的な言動は慎み、感情的にならず、ひたすら論理的合理的な反論に終始した。簡単に言えば、ヘイトスピーチで敵を作らない、ということだ。これがJCNの基本理念であり、その後の参加希望者もこの姿勢を貫ける方に限ることにした。

英語ではnon-confrontational rationalismと訳しつつ、欧米人メンバーと共有する。これは、中韓反日団体の挑発に乗らず、常に、より高次元の議論に徹する、という決意表明でもある。

次に、JCNの戦略の基盤となるのが、「防衛二元論」である。

国家レベルの防衛と、コミュニティレベルの防衛は、当然戦略が異なる。

国家レベルの防衛は、汚名を払拭して、名誉を取り戻すことが目的だ。沈黙もしくは「謝罪済み」と言って逃げるのは、国際社会では最悪の、不適切な対応である。この間違った対処を長年続けた結果、歪曲した歴史が既成事実化してしまっているが、それを解消しなければならぬ。

慰安婦問題に関して言えば、これまで少なくとも30年は放置してこの事態に至ったのだから、目的を達成するのに30年かかってもおかしくない。強力にかつ地道に对外発信を続けるしかない。それが国家レベルの防衛だ。

一方、我々民間による、コミュニティレベルの防衛は、あくまでも目の前の慰安婦像設置を阻止し、地域

とに強く抗議し、韓国と中国に謝罪
することを要求する。

2. 我々は、日本の軍国主義復
活、歴史修正主義、慰安婦や南京大
虐殺のような戦争犯罪を豪州人、お
よび豪州在住の韓国系中国系の第2
世代に伝えるため、展示会、フォー
ラム、セミナーなどを行う。

3. 我々は、日本軍が朝鮮人、中
国人、その他のアジアの若い女性を
拉致して性奴隷にしたことを広く知
らしめるために「3姉妹」の像を豪
州に複数建立する。

4. 我々は、世論を興し、日本政
府に圧力をかけ、物言わぬ良心的日
本人を目覚めさせ、日本が嘘の歴史
を次世代に伝えることを阻止する。

5. 我々は、アボット豪首相に、
第二次大戦中、日本が侵略し、女性
の基本的人権を蹂躪したことを認め
よう、日本がアジアの中で最良の
友人だという認識を変えよう、要

求する。

6. 我々は、豪州政府に、日本を
同盟国とみなすのをやめ、韓国と中
国を日本と同等に待遇するよう、現
在の日本重視の外交政策を変更する
ことを要求する。

7. 我々は米国政府に、日本に騙
されずに、安倍の狡猾な悪魔のよう
な本音を直視し、日本が再び軍国主
義に戻るのを阻止し、日本を韓国や
中国より尊重する外交政策の転換を
求める。

8. 我々は、韓国と中国両国の利
益のため、両国人民が共闘し、以上
の目的が達成されるまで活動を続け
ることをここに宣言する》
実に正直な人たちである。これな
ら誰が読んでも、彼らの真の目的
は、反日、反安倍であり、慰安婦像
はその政治的道具に過ぎないことが
はつきりわかる。

当初は「慰安婦像は女性の人権の

象徴で、敵対的なものではない」な
どと言っていたのに、ここでは「日
本軍の残虐性を広く知らしめるのが
目的だ」と明記している。これだけ
でも十分、慰安婦像がローカルコミ
ュニティにふさわしくない代物だと
わかる。ここまでは我々もすでに4
月1日の公聴会の時点で指摘した。

その上、この9月の記事は、はっ
きりと、アボット豪首相に、日本を
アジアにおける最良の友人とみなす
ことをやめさせる、と書いてある。
それは日豪関係の分断ということ
だ。

記事はさらに日米関係の分断にま
で言及し、米国政府に、安倍の狡猾
な悪魔のような本音を直視するよう
求めるとしている。なぜ活動方針
に、米国まで出てくるのか？

この反日団体の目的は、韓国人の
慰安婦センチメントを利用し、「日
豪・日米を分断し、日本を孤立させ

る」という中国共産党のアジェンダを遂行することだと自ら明かしているのである。

韓国政府は、慰安婦問題で対日批判を繰り返しているが、中国共産党の囁ませ犬として利用されていることに満足なのだろうか。中国及び北朝鮮と対峙して日米と同盟を結んでいることを韓国はすっかり忘れてきているようだ。

中国共産党の世界戦略に沿って世界中の大学に設置されている孔子学院という組織が、文化交流の皮をかぶったプロパガンダ組織に過ぎないことがわかって、米国やカナダの大学で孔子学院を閉鎖する動きが出ている。日本ではどうだろう。

最近では米国防総省も、中国共産党によるサイバー攻撃だけではなく、対米宣伝工作の横行にも危機感を持ち始めているとも聞く。

オーストラリアでも最近、中国人

留学生を使ったスパイネットワークが構築されていることがわかり、衝撃が走った。中国人の講師がオーストラリアの大学で民主主義について論じると、いつの間にか本国政府がそのことを知り、中国に帰国した際、何度も当局の尋問を受けたという。教え子の中国人留学生が密告していたのだ。

どうみても慰安婦像は、女性の人権の尊重とは無関係で、却ってオーストラリアの移民社会に分断と対立をもたらすとしか考えようがない。そればかりか、日豪関係や日米関係を分断破壊する目的の国際的謀略行為の道具と言っても過言ではない。

中韓連合の活動方針の最後には明確に「中韓の国家利益のために共闘する」と書いてあり、オーストラリアのためとは一言も言及していない。コミュニケーションの調和を破壊するだけでなく、これではオーストラリ

アの国益を損ねることは自明の理である。

従って、これからの戦略として、中韓の仕掛けるこうした工作を、オーストラリアや米国で広く周知させ、米豪の国益に反すると認識させる活動を慰安婦像対策の中心的戦略とすべきである。

すなわち慰安婦像の建立問題は、韓国や中国共産党の国際的謀略活動にどう対処すべきか、という日米豪共通の問題である。日米豪3カ国が共闘することを視野に入れたパラダイムを作ることが最も合理的な対応である。

外務省は

邦人保護任務に傾注すべき

JCN第3の理念が「邦人保護優先論」である。

外務省は従来「この問題を政治外交の問題とはしない」と発言してき

た。これはどういう意味なのか？

こちらがどう考えようと、相手は執拗に政治外交の問題にしているように見えるのだが。そう言い続けているれば中韓は慰安婦問題攻撃の矛を収めるのだろうか？

我々は、地元の日本人の母親と子供たちを護るために立ち上がった。

豪州人の副代表も「僕らの目的は、純粹に母親と子供を護ることなんだ」と言っている。すなわち、慰安婦像問題には、根本的に国内外の邦人保護の要素があると理解すべきだ。いうまでもなく、在外邦人保護こそ外務省の最重要任務のひとつであり、存在理由と言ってもよいだろう。

5月に中丸啓衆議院議員（次世代の党）にお会いした際にこの観点をお話ししたら、早速、国会質疑で取り上げてくださった。その模様もネット上で動画として公開された、J

CNメンバーは「ようやく日本の国会議員が、オーストラリアに在住する自分達の安全を考えてくれた」と感激した。

第4の理念が「小異を捨てて大同につく」である。JCNは前述したように、多種多様な人々の集まりである。意見が違うのは当たり前だ。

欧米人メンバーの間でさえ、意見の違いがよくある。しかし、共有する理念と大義があれば、共に戦える。高次の目的の為に、小さな差異を乗り越えて、一致団結することが極めて重要だ。

以上は、南半球で戦う我々JCNの理念と戦略のご紹介である。

我々は平凡な母親と父親の集団であるが、静かに、しかし合理的に戦っている。この慰安婦像の問題をどのように論ずるにせよ、本来、右も左もない、日本全体の問題であり、だからこそ、多種多様な人々が手を

携えて取り組めるはずだ。

だが日本国内では、この日本全体の問題が、リベラル左翼対保守という対立構造の中で論じられ、慰安婦像に反対すると、右だとレッテルを貼る風潮がある。それは日本社会の病理だ。日本人全体がイデオロギーを超え、一丸となって日本の名誉のために戦わずして、どうやって海外で慰安婦像建立を阻止できるのか？

日本国内での戦いも大変だが、海外では普通の母親やサラリーマンが日々、反日謀略組織の攻撃にさらされている実態がある。

海外各国での民間の戦いを組織化し、体系的で統一的な戦略を全世界で展開していくことができれば、我々の戦いは飛躍的に発展するだろう。そのためにも、我々JCNが、ひとつの参考モデルを提示できれば、まことに幸甚である。